

セマングム事業の生態用地に関する 国際シンポジウムに参加して

名古屋支店 環境技術・生態部 風間 崇宏

- 開催日時：2011年11月24日(木)9:30～18:00
- 開催場所：Seoul KyoYuk MunHwa HoeKwan(韓国ソウル)
- 主催：大韓民国環境部(The Ministry of Environment, Republic of Korea)
- 出席者：セマングム干拓事業に関わる政府関係者、一般市民、地元研究期間、市民団体、オランダ・ドイツ・日本からの政府機関及び研究機関など100名程度

サリの有数の漁場でしたが、漁獲量は急激に減少しました。この原因の1つとして貧酸素水塊の消長

シンポジウムの背景及び目的

セマングムとは、大韓民国全羅北道の黄海岸に広がる広大な干潟の名称です。1991年から大規模な干拓事業が開始され、2006年に全長33kmの防潮堤が完成し、現在陸地化が進んでいる状況です。

このシンポジウムでは、今後事業区域内に造成する生物のための生態用地の計画について、国内外を含めた研究者等の意見を含めて議論することを目的としていました。

シンポジウムの内容

韓国政府環境部大臣からの挨拶、環境部の水環境管理部門から生態用地造成計画の説明でシンポジウムが始まり、以下のセッションが行われました。

<セッション1:各国における自然再生政策について>

オランダの研究者、日本の環境省から、各国における自然再生政策の実施例について紹介がありました。

日本からは、環境省自然環境局自然環境計画課の山浦課長補佐が日本全国における自然再生の取り組みについての紹介がありました。発表後の質問では、韓国の人々が釧路川における河川の蛇行化による自然再生に興味をもっている様子がうかがえました。

<セッション2:適切な生態用地の造成方法について>

ドイツ、オランダ、日本、韓国の研究者から研究事例の紹介がありました。私からは「三河湾における干潟・浅場造成による環境改善事例」について紹介しました(写真1)。



写真1 発表時の様子

三河湾では古くからアマモ場が多く見られ、水産資源が豊かな海でした。しかし、1970年頃から、周辺域の開発により、水質、底質が悪化し、赤潮・青潮の発生が見られました。三河湾はア

が考えられています。

そこで、国土交通省中部地方整備局と愛知県が協力して、干潟・浅場を造成することによって貧酸素水塊を減らし、生物が生息できる場を取り戻す取り組みを実施しました。造成した干潟・浅場において生物の生息が回復できれば、その生物が植物プランクトンや有機物を摂食することにより、水質浄化能力が向上します。これにより、富栄養化が抑えられ、貧酸素水塊の発生が減少し、生物をさらに増加させる良い循環(ポジティブな循環)になることを期待した取り組みです。

発表の最後に、これまでの日本の事例における反省を踏まえて、沿岸の埋立が予想以上にその場や周辺の生態系を傷めるため、実施に際しては細心の注意が必要なこと、また、事業による影響を評価するためには、長期間にわたる十分な環境データが必要であることを、これまでの経験より提言させていただきました。

シンポジウムに参加して

シンポジウム前日に見た埋立地の風景(写真2)や工業用地及びレジャー用地を含めた総合的な埋立事業計画を見て、沿岸開発が絶頂期にあったバブル期の日本に戻ったような感覚がしました。



写真2 埋立地の風景

セッション後の総合討論では、地元の研究者から、すでに事業による生物への影響が出始めているという意見もありました。過去の反省から自然再生を行っている日本の事例を十分に活かして、セマングム事業が適切な沿岸環境管理ができる事業になるように願わずにいられません。

以上、今回の国際シンポジウムで大変貴重な経験をさせていただきました。この場をお借りして、関係者の皆様に御礼申し上げます。